

## 「沖縄アイデンティティ」の構造と規定要因 — 歴史・文化的視座からの尺度構成 —

倉元 直樹\*, 高良 美樹\*\*, 北村 勝朗\*\*\*

\*東北大学大学院教育情報学教育部 / 高等教育開発推進センター

\*\*琉球大学法文学部

\*\*\*東北大学大学院教育情報学研究部

**要旨：**本研究は、沖縄アイデンティティの様相を実証的に捉えようとする試みの一環である。ウチナンチュという言葉に現れる独特な沖縄アイデンティティの形成はその特有の歴史に由来する。琉球王国という独立国家として東アジアの交易の中心だった時期から沖縄戦、米軍による占領統治を経て返還され、現在に至るまで、外的な要因によって本土への同化と異化の圧力が繰り返されてきた。ウチナンチュ意識をエスニック・アイデンティティと捉える流れもあるが、研究によってナショナリズムや自民族中心主義を煽ることは避けなければならない。本研究は文化心理学的な歴史・文化的視座から量的研究法のアプローチで沖縄人意識とその規定要因を探る尺度構成を試みた。いくつかの尺度が試作されたが、実用に供するには課題も多い。今後は、質的研究法を加味した混合研究法を用いて研究対象の実像に迫ることを試みたい。

**キーワード：**沖縄、ウチナンチュ、エスニック・アイデンティティ、文化心理学、混合研究法

### 1 はじめに

本研究は沖縄アイデンティティ (Okinawan identity) の様相を実証的に捉えようとする試みの一環と位置づけられる。ところが、研究課題 (research question) の中核をなすべき「沖縄アイデンティティ」という心理学的構成概念 (psychological construct) をどのように位置づけるべきか、そのこと自体が明瞭ではない。その上、研究課題に対する効果的なアプローチの方法論を手探りで模索しなければならない。本研究の行く手には、出発時点から意識して超えて行かなければならない高いハードルが存在している。

#### 1.1 沖縄の歴史とアイデンティティ問題

沖縄には本土出身者と対比して自らを示す「ウチナンチュ」ということばがある。ウチナンチュというのは「ヤマトンチュ」ないしは「ナイチャー」という対概念に対して成立する相対概念と言える。すなわち、本土出身者は、例えば北海道の出身者も九州の出身者も一様にヤマトンチュと呼ばれる。この種の主観的に規定される概念の内包に統一したコンセンサスがないのは通例だが、一般的にはウチナー

ンチュもヤマトンチュも日系外国人に対しても適用され得る。そして、日系以外の外国人は特殊なケースを除いてウチナンチュでもヤマトンチュでもない。

平成7 (1995) 年に沖縄県在住県出身者の成人を対象に実施した國吉 (1998) の調査によれば、日頃、『<sup>ウチナンチュ</sup>沖縄人』とか、『沖縄の人』などという言葉) を「非常によく使う」と回答した者は 11.9%、「時々使う」と回答した者は 50.1% であったのに対し、「あまり使わない」が 26.5%、「ほとんど使わない」が 11.6% であり、「『<sup>ヤマトンチュ</sup>大和人』とか、『本土の人』、『内地の人』、『ナイチャー』などという言葉) を「非常によく使う」と回答した者は 20.4%、「時々使う」と回答した者は 60.4% であったのに対し、「あまり使わない」が 14.9%、「ほとんど使わない」が 4.4% であった。このような調査結果からも、沖縄アイデンティティを持つ人々の心には、自らを本土出身者に対峙して峻別することによって成立する独特の社会的アイデンティティ (social identity) が存在し、それが日常生活の中に生きている状況をうかがい知ることができる。そして、そのような「ウチナンチュ意識」は歴史的に形成されてきたもの

と考えられるのである。

沖縄は先史時代が長く、グスク時代と呼ばれる「農耕を主体とした生産経済に移行していった時代」は12世紀頃からだと言われる(例えば、新城, 1997)。14世紀後半から16世紀にかけては、中国に朝貢をして琉球国王としての承認を得ることによってオーソライズされる冊封体制の下で、琉球王国という独立した海洋国として、東アジアの交易の中心的存在となった。ところが、17世紀初頭の1609年に薩摩藩島津氏の侵入を許し、そのときから実質的にその支配下に置かれることとなった。同時に中国との関係における冊封体制も維持された。

明治維新の後、沖縄は明治5(1872)年に琉球藩となって日中両属体制が解消され、明治12(1879)年の琉球処分によって主権国家日本の都道府県の一つとなった。しかし、清国は日本の沖縄併合を承認せず、旧琉球王府や官僚の中には「頑固党」と呼ばれる現状維持を主張する親清派が勢力を維持するなど、統一した方向性は見いだせなかった。結局、最終的に日清戦争によって台湾が日本に割譲されることによって、帰属の決着をみた。

すなわち、沖縄にはかつては独立した主権国家であったという歴史的な記憶があり、隷属的な支配を経た後、日本という主権国家の一部として国際的にも認められるようになったという経緯がある。日本に帰属することが確定した時点から現在に至るまでの歴史は実は120年に満たない。しかも、日本の他地域で廃藩置県に当たる江戸幕府から明治政府への体制転換も一歩遅れた上に「琉球処分」という特別な用語が当てられたことから、少なくとも当時、明治政府と沖縄との間には帝国主義時代の植民地的意識に基づく「支配—被支配」の政治的な権力関係が存在していたと考えるのが自然だろう。

沖縄はその後も過酷な経済環境に置かれ、結果的に大量の海外移民が輩出されることとなった。さらに、第2次世界大戦では日本の領土としては最も激しく悲惨な地上戦を経験した。極端なケースとしては、米国に移民した家族が年少の子どもを連れて帰国し、年長の子どものみが米国に残って米国籍を取得した結果、兄弟が敵味方に分かれてしまうような状況も起こっていたという(例えば、前原・稲谷, 1996)。

戦後、沖縄は事実上米国の占領下に置かれた<sup>1)</sup>が、昭和47(1972)年に日本に返還され、現在に至って

いる。

## 1.2 歴史的経緯から見たエスニック・アイデンティティとしての「ウチナーンチュ意識」研究の成立

計量心理学的な沖縄アイデンティティ研究の嚆矢と言えるのは、東江平之の唱えた「空道(こうどう)的人格」の概念であろう(東江, 1963)。「空道」とは、沖縄出身の民俗学者伊波普猷(1876-1947)によれば「昔支那<sup>2)</sup>に行った使節が持参した琉球国王之印が捺された白紙のことで、使節が支那<sup>3)</sup>に着いてから如何様にもその時の国情に即した事を相手の気に入るように書き込める、いわば融通のきく用紙のことを指す」というものである。東江(1963)は、「沖縄人の行動様式の顕著なものとして事大主義と劣等感の二つを挙げることができる」とし、「この『空道』が沖縄人の宿命の縮図に思われて印象的だったので沖縄人の人格を表現する語として選んだ」としている。

ここで注目すべきは東江(1963)がかつての琉球王国の歴史的文物をウチナーンチュ特有の行動様式の命名に用いているのと同時に、「沖縄人」という一つの民族(nation)ないしはエスニック・グループ(民族集団, ethnic group)としてのニュアンスを含意した用語を自らの内集団に当てていることである。すなわち、ウチナーンチュ意識が歴史的に外からの異化の圧力によって形成されてきたことを歴史的背景として意識しつつ、ウチナーンチュが一つの独立したエスニック・グループ「沖縄人」として成立し、ウチナーンチュ意識がエスニック・アイデンティティとして捉えられるものだという自己認識が暗示されている。

実際には、琉球王国時代から沖縄の文化は本土に近かったと考えられている(例えば、高良, 1993)。言語学的にも「琉球語を日本語の一方言とすることはすでに定説となっている(東江, 1983)」。ところが、比嘉・霧多・新里(1963)によれば「江戸時代に琉球人は日本人ではないと考えられていた」という。それは、将軍交代と琉球国王の即位に際して江戸に送られた慶賀使、謝恩使<sup>4)</sup>に対して薩摩藩が中国風の衣装を着せ、中国風のふるまいを強制したことによる。「島津氏にとって琉球使節の江戸上りは、琉球という『異国』を付庸国として領有していることを、幕府および諸藩に誇示する最良の機会(比嘉

他, 1963)」というメリットがであったからだと考えられている。

同時に「島津と首里王府は、中国にたいしては、琉球が島津の支配下にあることをひたかくしにしていた(比嘉他, 1963)」。それは、日本との通交貿易を忌避する中国に対して、薩摩藩への隷属が発覚すると通交拒絶となることが必至だったためだとされる。かくして、冊封使の渡来の際には、「中国人がみて日本を連想しそうなものは、すべて避けるように細心の注意がはらわれた(比嘉他, 1963)」。このように、江戸時代には日中関係のはざまにあってウチナンチュは「琉球人」という一つの独立した民族として行動することが強いられてきたのである。

ところが、明治維新を経て状況は激変した。日本は近代国家の仲間入りを果たそうとする時代を迎えた。そのためには、国家の単位と同一の「日本人」という一つの民族が自律的な国民国家(nation state)を形成することが必要とされていた。沖縄では県当局の主導で同化政策が進められた。その範囲は沖縄独自の言語、服装、風俗、生活習慣に及んだが、ついに「昭和6(1931)年の『満州事変』以後、戦時体制へ推移するなかで、沖縄の伝統的文化や習俗を排斥する風俗改良運動が各地で推進」されるようになり、さらに氏名をヤマト風に変更する改姓改名運動が起こり、標準語励行運動が沖縄方言撲滅運動へとエスカレートしていった。「学校教育の現場では、方言を使用した児童・生徒を懲罰の対象とし、方言札を首にかけさせて罪人扱いすることさえ行われた」という(以上、安里・高良・田名・豊見山・西里・真栄平, 2004)。このような文化的同化政策は、国際政治的な環境の下での歴史的必然であったとしても、日本の他の地域と同様に、沖縄の人々にもナショナリズム(nationalism)に基づく「日本人」というナショナル・アイデンティティ(national identity)を着実に植え付ける作用を果たした。

戦後の占領政策の中では、米国民政府はウチナンチュを「琉球人」という一つの民族として、日本からの切り離すことを企図した。例えば、東江(2005)は自らの体験を振り返り「パスポートの代わりに、米国民政府発給の身分証明書を携帯させられ、国籍欄には琉球人と明記することが求められた。日本人と自称するのは詐称に当たり、身分証明書取得の要件を欠くことになった。」と述べている。こ

のような米国民政府の政策的意図とは裏腹に最終的に沖縄返還が実現したのは、ウチナンチュ自身が「日本人たること」を希求したという民意が大きく作用したと言える。例えば、昭和31(1956)年に起こった軍用地接收をめぐる「島ぐるみ闘争」において展開されたのは「一括払いを容認することは日本国の領土を売り渡すことになり、日本復帰の手がかりを失うことになる(鳥山, 2000a)」といった理論構成であり、本土復帰によって米国という異民族支配からの脱却を図ろうとしたのである。

以上の歴史的経緯を踏まえてあえて誤解を恐れずに言えば、「ウチナンチュ」が同時に「日本人」でもあるということは必ずしも自明のことではなく、歴史的経緯の中で外側からの力で形成され、また、同時にウチナンチュ自身によって主体的に選り取られてきた結果なのだと考える見方が成立する。歴史上の思考実験としては、「琉球人」という独立したエスニック・グループが独立国家を形成する、ないしは、沖縄が中国の一部となり、中国人というナショナル・アイデンティティを獲得していた可能性があったと夢想することも荒唐無稽とは言い切れない。沖縄アイデンティティに関する計量心理学的アプローチがエスニック・アイデンティティ(ethnic identity)の枠組を前提とする形で始まったことには、以上のような歴史的経緯が背景にあるためだったと思われる。

昭和47(1972)年の沖縄返還からしばらく経過した後も、エスニック・アイデンティティの枠組を前提として、沖縄アイデンティティを捉えようとする試みが続けられてきた。それまでの計量心理学的沖縄アイデンティティ研究をまとめた東江(1991)には「沖縄人の意識構造(東江, 1991)」という書名が冠せられた。さらに、例えば、大阪へ移住した沖縄県出身者へのインタビュー調査を行った石井(1993)もウチナンチュに「沖縄人」という表現をあて、ウチナンチュ意識の研究に「エスニシティ」という用語を適用している。

### 1.3 沖縄アイデンティティの変容

沖縄返還、本土復帰から40年が経過した現在、一見沖縄は日本の一部としてすっかり溶け込んだように思われる。例えば、独立を志向するナショナリズムの文脈で沖縄を捉え、ウチナンチュを日本の内

部にある少数民族と捉える見方は一般の日本人にはほとんど見られないと思われる。いわゆる「沖縄ブーム」を経た現在、本土から見た沖縄のイメージは大きくプラスの方向に振れた。かつてのように、出身地が沖縄であることがスティグマ (stigma) となるような差別感覚は、少なくとも明示的には存在しなくなったと言えるだろう。日本全体としては、「沖縄県」をことさらに異質な存在としてではなく47都道府県という行政区分の単なる一つの単位として捉える枠組が自然となっている。

その一方で、上述のような歴史上の記憶が風化するには、沖縄返還から40年という時間は短すぎるとも言える。しかも、沖縄県内に抱える米国基地問題が進展しないことは、本土復帰後も期待したほどの変化はなく米国占領時代の象徴が解消されていないという印象を多くの住民に与えている。本土復帰前後から「沖縄住民が『即時・無条件・全面返還』をかけた“基地のない平和な島”を望んでいた」が、沖縄返還に際して日本政府が決定した『復帰対策要綱』は基地の存続を前提にしており、その多くは沖縄住民の要求からかけ離れたものであった(以上、新城, 1997) という認識が広がっていった。そして、普天間基地問題等の米軍基地に絡む政治的問題がクローズアップされるたびに、本土においても日常忘れかけている「内なる異質な存在」としての沖縄の歴史の記憶が呼び覚まされる。同時に、そういった政治的状況が沖縄アイデンティティの様相に対して一定の影響を与えていることは否めないだろう。沖縄アイデンティティをどう捉えるかという問題は、海外も含め沖縄内外に在住するウチナンチュや沖縄県在住者の間で様々な位相と強度を抱え込んだ複雑な様相を呈していると思われる。

先述の國吉 (1998) の調査によれば、自分自身の気持ちとして「日本人になりたいくて、既に日本人になっている」と回答した者が22.7%、「日本人になりたいが、日本人になれないでいる」が13.9%、「日本人にはなりたくないし、日本人になってもいい」が13.7%、「日本人にはなりたくないが、日本人になってしまった」が15.0%、「わからない」が34.7%と大きく割れた。さらに、林 (2009) が平成17 (2005) ~19 (2007) 年の3年間にわたって行った意識調査によれば、「沖縄独立」の是非をめぐる沖縄住民の見解として、「独立すべきではない」が

57.4% ~ 69.6% と多数派を占めたものの、「独立すべき」と回答した者も12.3 ~ 24.9% 存在した。エスニシティ、ないしは、ナショナリティとしてのウチナンチュ意識が単なる過去の遺物ではないことを指し示す結果となった。

#### 1.4 社会的アイデンティティ研究の視座と方法論

沖縄アイデンティティが少なくとも一部の人々の間ではエスニック・アイデンティティとして成立していると解釈できる調査結果が示されたわけだが、その一方で國吉 (1998) や林 (2009) の研究には一種の不自然さが付きまとうことも否めない。國吉 (1998) の研究は「天皇観・皇室観」といった政治的にデリケートな問題を扱った一連の研究の一環である。また、林 (2009) は台湾、香港、マカオといった東アジア地域における政治的マイノリティとの比較研究という枠組の中での意識調査である。すなわち、多分に政治性を帯びた問題設定の文脈を前提として、沖縄アイデンティティが論じられている。そのため、これらの調査が調査協力者にとって価値中立的な志向性を持った社会科学的実証研究として受け止められたかどうかについては、やや疑問が残る。もしも、東江 (1963) の「空道的人格」という概念がウチナンチュの性格特性の一側面を的確に表現しているとするれば、調査協力者の黙従傾向 (acquiescence) を刺激して一定方向の回答が誘導された可能性も捨てきれない。

エスニック・アイデンティティの研究がともすればナショナリズムの喚起につながりかねないことは、研究主体は十分認識しておくべきだろう。アーネスト・ゲルナーによれば、ナショナリズムとは「第一義的には、政治的な単位と民族的な単位が一致しなければならないと主張する一つの政治的原理である (Gellner 1983 / 加藤監訳 2000)」とされる。Gellner (1983 / 2000) では、ナショナリズムの単位となる民族 (nation) については以下の二つの仮の定義が示されている。一つは文化に力点を置いた定義であり「二人の男は、もし、彼らが同じ文化を共有する場合に、そしてその場合にのみ、同じ民族に属する。その場合の文化が意味するのは、考え方・記号・連想・行動とコミュニケーションとの様式から成る一つのシステムである」とされる。もう一つは意志に力点を置いたものであり「二人の男は、もし、彼ら



がお互いを同じ民族に属していると認知する場合に、そしてその場合にのみ、同じ民族に属する。換言するならば、民族は人間が作るのであって、民族とは人間の忠誠心と連帯感によって作り出された人工物なのである」とされる。もちろん、林 (2009) も調査結果が沖縄住民の『日本人』意識も強い」という結論を導いており、沖縄アイデンティティに対して政治性を帯びたナショナル・アイデンティティと同一視する見方を取っているわけではないが、一方で、調査結果を用いて「沖縄社会には、『日本』という国家的枠組みからの離脱を考える県民が確実に存在していることが示唆されている。これは、おそらく他の都道府県にはない状況であり、このことがまさに、沖縄県民のアイデンティティとは単なる郷土意識や地元への愛着の強さといった次元とは異なる含意や意味づけを持つものとみなされる所以であろう」といった議論を展開している。しかし、先述の Gellner (1983 / 2000) の二番目の仮定義を敷衍するならば、沖縄アイデンティティをことさらに特別なものとする意識は「人工物」として作り出すことも可能だと考えられるのだ。ナショナリズムの感情が、先述の政治的原理を「侵害されることによって喚び起こされることによる怒りの気持ち (Gellner, 1983 / 2000)」とするならば、学術的研究がナショナリズムや自民族中心主義 (ethnocentrism) を刺激し、喚起するような機能を担うことは、本来、注意深く避け避けるべきことなのではないだろうか。

ナショナリズムや自民族中心主義は、さらなる新たな問題を引き起こす契機となる懸念がある。それは、同一の民族、ないしは、エスニック・グループとされる集団の成員が、実際には価値観を含む様々な文化的側面で一様ではあり得ないからだ。例えば、沖縄に関してもその内部の多様性は無視できない。東江・大城・東江・本永・石川・詫摩 (1983) は東江 (1981) の資料に対して因子分析による再分析を行なって、那覇方言が本土の9方言とかけ離れた布置を描くと同時に、中学生に対する方言理解テストの分析結果から宮古方言、八重山方言が奄美方言、本部方言、那覇方言と異なる因子を形成することを見出し、方言理解における多様性を見出した。実際、歴史的に見ると微妙な問題が浮かび上がってくる。日清両国の間で沖縄の領有権が争われた際には、日清双方の条約案で宮古・八重山を中国領土とするこ

とが提案され、明治13 (1880) 年には日本案での交渉妥結が決まったが、正式調印には至らなかった (新城, 1997)。ナショナリズムの論理は内集団の凝集性を高める圧力となる。しかし、実質的に多様に富んだエスニック・グループ内部で同じ論理が開かれると集団内部にさらにマイノリティが生まれ、その中で新たなナショナリズムが勃興する火種となりかねない構造なのである。沖縄の場合は、沖縄本島と宮古列島、八重山列島を含む先島諸島とを一樣に考えて良いかどうかという問題が提起されることになる。

このようにエスニック・アイデンティティに類する社会的アイデンティティの研究には、常にナショナリズムとの距離をどのように捉えるのかという困難な課題が付随する。

政治的な問題に絡め取られずに価値中立的にエスニック・アイデンティティにアプローチしようとした計量心理学的研究として、平・川本・慎・中村 (1995) が挙げられる。平他 (1995) は在日朝鮮人青年の民族的アイデンティティの測定を試みた。明治43 (1910) 年の日韓併合、昭和25 (1950) ~ 28 (1953) 年の朝鮮戦争を経て朝鮮半島の南北に二つの国家が対峙する状況の下での在日朝鮮人という存在は、国籍そのものが民族的エンブレム (ethnic emblem) として機能していることが特異であり、定義そのものから政治的存在と言える。「在日朝鮮人」という呼称それ自体が文脈によっては北朝鮮国籍を持つことを含意する表現である。しかし、実際には国籍と出自は全く一致していない。

平他 (1995) では、あえて調査対象者を北朝鮮籍を持ち「明らかに『在日朝鮮人』という民族的アイデンティティを持っている青年」に意識して限定することによって、彼らの民族的アイデンティティがその場その場の対人的環境に応じて柔軟にシフトする様相を描いた。そして、それが民族文化的要素 (ethno-cultural factors) の保持の程度と深い関わりにあることを見出した。すなわち、本人が主観的に在日朝鮮人という強いエスニック・アイデンティティを自覚していても、実際には身近に朝鮮民族的な要素が少なく、日常の文化的行動様式が一般の典型的な日本人と区別がつかない場合には、民族的アイデンティティそのものが状況依存的に揺れ動くことを示したのである。

民族や歴史、文化に関わる社会的アイデンティティの研究を行う場合、ナショナリズムの感情と結びつきやすい政治的要素を完全に排除することも難しい。むしろ、政治的要素がどの程度アイデンティティ形成に関わっているのかという問題は、それ自体を規定要因の一つと捉え、他の要因と同列に定量的に議論されるべき性質のものと考えられる。

## 2 目的

### 2.1 沖縄アイデンティティ測定尺度の構築

本研究は沖縄アイデンティティがエスニック・アイデンティティと呼べるものか否かというような問題は複雑であり、本研究で結論が出るものとも思えない。そこで、本研究ではその問題を一旦棚上げした上で、方法論として計量心理学的エスニック・アイデンティティ研究の流れを踏襲する。

研究プロジェクト全体としては、研究課題の設定として平他 (1995) の視点を一部取り入れ、文化的な要素の保持の程度と沖縄アイデンティティの強さの関係を解明することを目的とする。その中で、本研究ではアイデンティティの強さやその説明要因としての文化的要素の保持の程度を測定する尺度の叩き台となる質問項目を作成して、尺度化に向けての準備を行う。

### 2.2 文化の測定

文化に関わる計量心理学という観点から見ると、本研究は基本的に西欧社会の枠組を前提として共通の測定方法を用いて複数の文化の比較を目的とする伝統的な比較文化心理学 (cross-cultural psychology) ではなく、「当該の文化そのものの民族史的理解に根ざした (北山, 1997)」文化心理学 (cultural psychology) の系譜として位置づけられるアプローチを取る。文化心理学では、「心のプロセスを、それぞれの集団がその歴史の流れのなかで蓄え、作り出してきた社会・文化的プロセスの一部として理解しようとする (北山, 1997).」とされる。したがって、文化そのものを計量し、測定するプロセスが不可避となる。

北山 (1997) は、文化を「そこにある社会の歴史から築かれ、蓄えられてきた慣習や公の意味の構造」の「両者を合わせたものを文化と定義する」としている。公の意味の構造には「その社会にあるイデ

オロジーや人間観などが含まれる」とされる。慣習や公の意味の構造の構成要素をどのように考えるかについては、実情に応じて幅があると考えべきだろう。本研究で何を文化の構成要素としたかという点については、次節の質問紙の構成で具体的に詳述する。

## 3 方法

### 3.1 質問紙

本研究の調査は、研究プロジェクトの最初の段階として、大学生を対象とすることとした。偏にデータの取りやすさを優先したということがその理由である。

本研究の調査は2回に分けて行われた。途中で一部に見直しが行われたので、その内容は完全には一致しないが、本稿で用いる部分は共通である。本稿では2回目の調査用紙に合わせて記述する。第1回目だけの調査の結果については学会発表として公表されている (倉元・久久田・高良, 2005)。具体的な質問項目は補遺を参照のこと。

質問紙は以下の五つのセクションで構成されている。

#### 3.1.1 デモグラフィック・プロフィール

「セクションI」はデモグラフィックなプロフィールである。「年齢」「性別」「職業的立場」といった一般的な内容の後の質問項目は、沖縄の文化的要素に関わる質問である。

まず、「出自」と「居住地」に関する質問である。戦前に海外を含む県外移住者を大量に輩出していた時期、米国占領下で移動が著しく制限されていた時期と比べて、本土復帰後は県境を超えた流動性も個人レベルで高まっていることが考えられる。また、県内での流動性も時代とともに徐々に活発化していることが想定される。自らの出自に絡むアイデンティティをどこに帰属させるかという意味合いにおいて極めて重要な質問項目となると考え、多くの項目数を当てている。

質問項目9の「トートーメ」とは、家督の継承に関わる象徴的なことばだが、強いて言えば「位牌」を意味する。トートーメにはそれにまつわる様々な禁忌もあり、家督の継承という文脈では「時として様々な葛藤の要因にもなっており、社会問題として

根深い様相を示す (栗国, 2000)」という。沖縄の伝統的な文化的価値観の観点からは重要な要素である。

セクションⅠの最後の項目は「将来の居住地」という聞き方で沖縄との距離感を尋ねたものである。

### 3.1.2 沖縄の歴史・文化

「セクションⅡ」は沖縄の歴史や文化に関わる事象である8項目に対する経験と意識について尋ねた質問項目である。いずれも沖縄県内に継続して在住している者であれば知識があるが、年齢によってどこまでリアルタイムに経験したものであるか、幅がある。また、項目の内容も政治的で社会的に重みを感じさせるものから大衆文化的な内容までが盛り込まれた。

### 3.1.3 性格・ことば

「セクションⅢ」では文化的習慣の中でも物理的な実体を持たない心理的な要素を取り上げた。

質問項目15は「沖縄的」、「日本的 (本土的)」とされる性格特性語である。東江 (1991) は、学生を対象にした川平 (1988) の研究から、ウチナーンチュを特徴づけるとされる「沖縄の性格特性語」もヤマトンチュを特徴づけるとされる「日本の性格特性語」もそれに関わる自己認知については出身地による差はなかったとしている。すなわち、ウチナーンチュ、ヤマトンチュのステレオタイプとしての性格特性については広く共通認識が共有されているが、それがパーソナル質問として自分自身に当てはまるかどうかを聞かれた場合には、ステレオタイプとは一致しない、という興味深い結論が導かれているのだ。本研究では、東江 (1991) がまとめた30個の性格特性語を質問項目として採用することとした。

質問項目16は方言の使用頻度に関するもので、16項目が選定された。

### 3.1.4 食べ物・習慣

「セクションⅣ」は食べ物、生活習慣といった、物理的な実体に関わる内容を文化的構成要素として取り上げたものである。

沖縄には古くからの郷土料理がある。また、米国統治時代に米国の食文化の影響を受けた独特の食文化が見られる (金城, 1995)。また、本土復帰後に

は「日本型食生活の推進と県民のヘルシー志向を反映して洋風化から和風化へ (金城, 1995)」と転換した。質問項目17の14項目は、食生活習慣における文化的要素を測定しようとするものである。

質問項目18は「年中行事」に関する18項目、質問項目19は「沖縄的祭事」等の経験に関する8項目である。

### 3.1.5 沖縄に対する思い

「セクションⅤ」は沖縄アイデンティティの強さを測定するための20項目である。

以上、多くの項目は5段階評定形式であり、一部に多肢選択形式、二者択一形式、自由記述形式が含まれる。なお、第1回目の調査には「死生観」に関わる項目が含まれていたが、2回目では調査票の分量を減らして回答者の負担を減らすために除外された。

## 3.2 調査対象者

調査対象者は沖縄県内の二つの大学に進学する学生205名 (第1回調査74名、第2回調査131名) である。なお、調査対象者には県外出身者も含むこととした。昭和47 (1972) 年の本土復帰以後は沖縄と本土との往来が完全に自由になり、出自や居住地で境界を設けることが難しくなっていることが一つの判断理由である。さらに、アイデンティティは第一義的に本人の主観によって規定されるものと考えれば、県外から移住してまだ日が浅い者であっても沖縄アイデンティティを持っている可能性は排除できない。

調査は平成17 (2005) 年2~7月にかけて実施された。調査の実施にあたっては、回答が自由意思に基づくものであり、強制ではないことを十分説明した。

## 3.3 尺度構成に向けた手順

「セクションⅡ」~「セクションⅣ」はアイデンティティの形成に関与する可能性がある沖縄固有の文化的特性を抽出することを目的とした項目群である。一方、「セクションⅤ」は「沖縄アイデンティティ」の測定尺度項目群の候補である。

文化的特性の大きな認識枠組としては大別すると「歴史・文化的事象」、「自己認識・言語」、「生活習

慣」といった概念を想定した構成となっている。さらに、下位カテゴリーとして「自己認識・言語」は「性格に関する自己認知」と「方言」, 「生活習慣」には「食習慣」と「生活習慣, 年中行事」, 「祭事」に対する参加経験が基本的な構成要素となっている。本研究では、それぞれの構成要素の構造を探索的因子分析 (exploratory factor analysis) の手法によって探ることとした。

### 3.3.1 探索的因子分析の手順

各項目群はそれぞれ別個に扱うこととし、それぞれに探索的因子分析を行った。5段階評定形式の項目はリッカート尺度 (Likert scale) として数量化し、得られた修正相関行列に対して、カイザー・ガットマン基準 (Kaiser-Guttman criterion) と固有値 (eigenvalue) のスクリー・プロット (scree plot) を併用して因子数の候補を選び、因子としてまとめられた項目内容の解釈との兼ね合いも考慮しながら最終的な因子数を決定することとした。

共通性 (communality) の初期値として SMC (Squared Multiple Correlation), を選択し、バリマックス回転法 (varimax rotation) による直交解 (orthogonal solution) から無理なく解釈できる因子構造を採用した。原則的に因子負荷量 .30~.35以上の項目を尺度に含めることとした。

また、それらの項目得点 (item score) の単純和をもって尺度得点 (scale score) とした。

### 3.3.2 尺度分析

本研究によって仮に構成された現時点での尺度に対し、基本的な要約統計量による分布の検討とクロンバックの $\alpha$ 信頼性係数 (Cronbach's reliability coefficient  $\alpha$ , 以下、必要に応じて「 $\alpha$ 係数」と略記する) による信頼性のチェックを行うこととした。

## 4 結果

### 4.1 調査対象者プロフィール

概要は以下の表1に示すとおりである。

調査に協力し、質問紙に回答した者は沖縄県内の二つの大学で学んでいる学生合計207名 (第1回調査76名, 第2回調査131名) であった。第1回目調査では男性が29%, 女性が71%と、女性が非常に多かったが、第2回目の調査では男女半々に近い構成

(男性が45%, 女性が55%) であった。

職業の内訳を見てみると、第1回目調査で「主婦」, 「その他」と回答した者がそれぞれ1名ずついた。本研究の調査対象母集団を「沖縄県在住の県内の大学へ通う学部学生」と明確に区切るために、その2名は実質的な分析からは除くこととした。したがって、分析対象とした有効回答者数は合計205名 (第1回調査74名, 第2回調査131名) ということになる。

年齢は第1回調査ではほとんどが20代であったが、第2回調査では10代が61%を占めていた。

沖縄県居住歴は第1回調査では「一時滞在」の3名(8%) 以外は少なくとも両親の代から沖縄に在住しており、「先祖代々」と回答した者がほとんど(88%) という結果であった。それに対して、第2回調査では「一時滞在」が32名(24%) 混じっていた。県外在住経験に関しては、多数派は県外在住の経験がなく、県外に住んだ経験があるのは第1回調査では16名(21%), 第2回調査でも38名(29%) にとどまっている。一方、県内の移住歴は第1回調査では40%, 第2回調査では39%と、それぞれ4割ほどが「ある」と答えている。所在地の居住年数の平均は第1回調査が13.1年, 第2回調査が6.5年と第1回調査の回答者の方が概して長い。第2回調査に多くの一時的滞在者が含まれていることが主な原因だと思われる。

全体として言えば、生まれ育った場所にそのまま居住してきたケースが最も多いが、県内での移動は珍しくはないというのが本研究の調査対象者全体的な特徴と言えよう。なお、沖縄県外居住歴の詳細については、該当者が比較的少数にとどまっていることもあり、集計と記述を省略した。

居住地の文化的環境として尋ねた近所に住む家族や親戚の存在については、居住地域に親戚がいるのが二つの選択肢の回答者数を合わせて第1回調査で49名(64%), 第2回調査で67名(51%) と半数を超えている。一方、「自分だけ」という回答は第1回調査が11%, 第2回調査が31名(24%) であった。

トートメについては、「継ぐ立場」にある者はそれぞれ12%, 9%と少数派である。なお、「トートメとは何かわからない」と回答した者は第1回調査では14名(19%) と2割ほどであったが、第2回調査では47名(36%) と1/3以上を占めた。



表1. 調査データの概要

	第1回調査 (n=76)	第2回調査 (n=131)
年齢	10代3名(4%), 20-24歳68名(89%), 25歳, 28歳, 31歳, 50歳, 62歳各1名	10代80名(61%), 20-24歳49名(37%), 28歳, 34歳各1名
性別	男22名(29%), 女54名(71%)	男58名(45%), 女72名(55%)
職業	学生74名(97.4%), 主婦1名, その他1名	学生131名(100%)
沖縄県居住歴	先祖代々65名(88%), 祖父母の代2名(3%), 両親の代1名(1%), 一時滞在6名(8%)	先祖代々93名(71%), 祖父母の代2名, 両親の代2名, 自分の代2名, 一時滞在32名(24%)
県外在住経験	あり16名(21%), なし60名(79%)	あり38名(29%), なし60名(71%)
県内移住歴	あり30名(40%), なし46名(61%)	あり51名(39%), なし80名(61%)
現在地居住歴	平均13.1年, 標準偏差8.2年, (0.3~32年)	平均6.5年, 標準偏差6.5年, (0.3~22年)
家族・親戚	自分だけ8名(11%), 家族だけ2名(3%), 県内に親 戚16名(21%), 居住地域に一部親戚24名(32%), 親戚多数25名(33%)	自分だけ31名(24%), 家族だけ2名(2%), 県内に親戚30名(23%), 居住地域に一部親戚35名(27%), 親戚多数32名(24%)
トートーム	継ぐ9名(12%), 継がない34名(45%), 未定12名 (16%), 分からない14名(19%), ない6名(8%)	継ぐ12名(9%), 継がない41名(32%), 未定11名(9%), 分からない47名(36%), ない17名(13%), その他(1名)
県内居住希望	即時県外移住希望3名(4%), 県外移住予定6名 (8%), 希望しないが移住予定3名(4%), 県内居住希望55名(72%), 県内居住熱望4名(5%), 県内在住絶対5名(7%)	即時県外移住希望12名(9%), 県外移住予定29名(22%), 希望しないが移住予定5名(4%), 県内居住希望73名(56%), 県内居住熱望7名(5%), 県内在住絶対5名(4%)

将来の居住地については、第1回調査では三つの選択肢を合わせて84%が県内で住み続けることを希望していた。一方、第2回目調査では多数ではあるが、約2/3(85名, 65%)にとどまった。

第1回調査と第2回調査では、後者に一時滞在者が多いという特徴がみられたが、年齢層などの本質的な特徴では差異がないと考え、以後の分析では区別しないこととした。なお、双方のデータを合わせた集計結果は、高良・與久田・倉元(2012)を参照のこと。

## 4.2 「沖縄の歴史・文化」の構造

### 4.2.1 基礎集計結果の概要

歴史的出来事については、「沖縄戦」、「復帰運動」は全ての回答者にとって生まれる前の出来事であり、「沖縄返還」の時に生まれていた者は3名のみ、「国体日章旗焼き捨て事件」ではほとんどの回答者(86.3%)が「生まれていたが、幼かったので覚えて

いない」という回答であった。したがって、これらの三つの歴史的出来事は、本研究の回答者は自らの直接的な体験としては経験しておらず、何らかの影響を受けたとしてもそれは後に知識として得られた情報に基づくものである。

「沖縄水産高校の甲子園準優勝」については「生まれていたが幼かったので覚えていない」と回答した者が67名(40%)であったのに対し、「身近に体験した出来事がある」と回答した者が40名(25%)と分かれた。

「タレントブーム」「沖縄サミット」「ちゅらさん」は全員がリアルタイムで知っている出来事であるが、「身近に体験した出来事がある」と回答した者は96~105名(47~51%)であった。

おおむね同世代に属する回答者なので、歴史的出来事に関する直接体験の個人差は小さい。もし、あるとすれば、平成に入ってからのものである。身近に感じるような体験があったか否かという点に尽

きるであろう。

一方、歴史的事象から受けた影響力は直接体験の有無とは一致しない。尺度値を影響が小さかった順に「1」～「5」として数量化した場合、歴史的出来事を平均値が大きかった順に並べると「タレントブーム (3.14)」「沖縄戦 (2.99)」「ちゅらさん (2.92)」「沖縄サミット(2.70)」「沖縄返還 (2.62)」「復帰運動 (2.36)」「沖縄水産高校の甲子園準優勝 (2.09)」「国体日章旗焼捨て事件 (1.36)」の順となった。

「最も大きな影響を持つもの」として挙げられた項目<sup>3)</sup>で10%を超えるものは、「沖縄戦」が67名 (33%)、「タレントブーム」が46名 (23%)、「ちゅらさん」が35名 (17%)であり、おおむね5段階評定の結果と一致する。

以上の結果から、歴史的な出来事については、自らの直接体験と何らかの形で事後的に学習した知識とが混じりあって影響力を持っていることが推察される。

#### 4.2.2 沖縄の歴史・文化の因子構造

沖縄の歴史的事象から受けた影響に関する因子構造は表2に示す通りである。8項目を2因子構造で分析することが適当と判断した。

因子負荷量を見る限り、第1因子の「日章旗焼捨」を除いてきわめて負荷量が高く、安定していることが見て取れる。累積寄与率も52.0%と十分な程度に大きかった。

表2. 歴史的事象（影響）の因子構造

	第1因子	第2因子	共通性	平均*
3. 沖縄返還	<u>0.910</u>	0.132	0.845	2.99
2. 復帰運動	<u>0.893</u>	0.075	0.804	2.36
1. 沖縄戦	<u>0.775</u>	0.118	0.615	2.62
4. 日章旗焼捨	<u>0.335</u>	0.248	0.174	1.36
8. サミット	0.107	<u>0.727</u>	0.539	2.09
9. ちゅらさん	0.013	<u>0.673</u>	0.453	3.14
6. タレント	0.128	<u>0.663</u>	0.456	2.70
5. 甲子園準優勝	0.279	<u>0.445</u>	0.276	2.92
因子寄与	2.444	1.717	4.161	
累積寄与率			52.0%	

\*:得点範囲 1~5

第1因子には「沖縄返還」「復帰運動」「沖縄戦」「日章旗焼捨」が分類されており、「歴史・政治」と命名された。

第2因子には「サミット」「ちゅらさん」「タレントブーム」「沖縄水産高校の甲子園準優勝」が分類されている。「芸能・文化」と命名された。

#### 4.3 「性格」の構造

東江 (1991) によれば、性格特性語に関してはウチナンチュ、ヤマトンチュそれぞれに対してステレオタイプが存在する。本研究では、東江 (1991) の分類にしたがい、沖縄的性格を示す語の候補として「のんき」「ひとがいい」「おおらか」「人情に厚い」「自由な」「正直」「協力的」「単純」「幸福」「ひょうきん」「感情的」「のろい」「率直」「はきはきしない」「興奮しやすい」の15項目、本土の性格を示す語の候補として「勤勉」「現実的」「注意深い」「敏感」「利己的」「神経質」「礼儀正しい」「思慮的」「辛抱強い」「従順」「疑い深い」「主体的」「道徳的」「独立心が強い」「頑固」の15項目が挙げられている。自分の性格として「当てはまる」とされた平均値が高い順に「幸福 (沖縄の性格) (3.85)」「協力的 (沖縄の性格) (3.72)」「感情的 (沖縄の性格) (3.69)」「道徳的 (本土の性格) (3.68)」「正直 (沖縄の性格) (3.64)」「人情に厚い (沖縄の性格) (3.60)」「単純 (沖縄の性格) (3.60)」「自由な (沖縄の性格) (3.59)」「現実的 (本土の性格) (3.59)」「思慮的 (本土の性格) (3.58)」「のんき (沖縄の性格) (3.52)」「頑固 (本土の性格) (3.52)」「敏感 (本土の性格) (3.50)」「礼儀正しい (本土の性格) (3.48)」「辛抱強い (本土の性格) (3.47)」「ひとがいい (沖縄の性格) (3.45)」「おおらか (沖縄の性格) (3.37)」「注意深い (本土の性格) (3.35)」「疑い深い (本土の性格) (3.31)」「利己的 (本土の性格) (3.30)」「従順 (本土の性格) (3.28)」「興奮しやすい (沖縄の性格) (3.24)」「神経質 (本土の性格) (3.24)」「率直 (沖縄の性格) (3.22)」「主体的 (本土の性格) (3.18)」「ひょうきん (沖縄の性格) (3.17)」「勤勉 (本土の性格) (3.05)」「はきはきしない (沖縄の性格) (2.98)」「独立心が強い (本土的

性格) (2.96)」「のろい (沖縄の性格) (2.89)」となった。沖縄の性格, 本土の性格といった形で平均値が固まることはなく, 散らばっている。

性格の自己認知に関する因子構造は表3に示す通りである。想定上は2因子で構想されたものであったが, 3因子構造として分析することが適当と判断された。30項目のうち, 3項目が分類不能であった。一見して, 当初の想定通りに項目がきれいに分類されていないことが分かる。累積寄与率も30.5%と

やや物足りない。

第1因子に分類された10項目には「沖縄の性格」「本土の性格」の項目が混在している。どちらかと言えば全体的にポジティブな内容で, しかも「当てはまる」と評価される傾向が高い項目が多い。したがって, この因子は「社会的望ましさ」を表しているのではないかと考えられるので, そのように命名された。

第2因子は「本土の性格」が8項目, 「沖縄の性

表3. 性格の自己認知の因子構造

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性	平均*
7. 協力的 (沖縄の性格)	<u>0.684</u>	-0.131	0.169	0.514	3.75
23. 思慮的 (本土の性格)	<u>0.621</u>	0.362	0.133	0.534	3.52
4. 人情に厚い (沖縄の性格)	<u>0.586</u>	-0.049	0.371	0.484	3.58
28. 道徳的 (本土の性格)	<u>0.585</u>	0.056	0.044	0.347	3.73
22. 礼儀正しい (本土の性格)	<u>0.529</u>	0.169	0.163	0.335	3.43
3. おおらか (沖縄の性格)	<u>0.505</u>	-0.305	-0.027	0.349	3.39
6. 正直 (沖縄の性格)	<u>0.495</u>	-0.121	0.238	0.316	3.65
2. ひとがいい (沖縄の性格)	<u>0.474</u>	-0.199	0.057	0.268	3.44
24. 辛抱強い (本土の性格)	<u>0.466</u>	0.049	-0.009	0.220	3.50
16. 勤勉 (本土の性格)	<u>0.443</u>	0.316	0.005	0.296	3.04
18. 注意深い (本土の性格)	0.418	<u>0.671</u>	-0.086	0.633	3.37
21. 神経質 (本土の性格)	0.388	<u>0.537</u>	-0.134	0.457	3.15
17. 現実的 (本土の性格)	0.346	<u>0.514</u>	0.009	0.384	3.58
26. 疑い深い (本土の性格)	0.334	<u>0.478</u>	0.036	0.341	3.23
19. 敏感 (本土の性格)	0.245	<u>0.467</u>	0.132	0.295	3.47
20. 利己的 (本土の性格)	0.304	<u>0.463</u>	0.055	0.310	3.28
27. 主体的 (本土の性格)	-0.005	<u>0.363</u>	0.312	0.229	3.16
29. 独立心が強い (本土の性格)	0.024	<u>0.352</u>	0.312	0.222	2.93
1. のんき (沖縄の性格) *	-0.210	<u>-0.349</u>	0.018	0.166	3.58
8. 単純 (沖縄の性格) *	0.109	<u>-0.394</u>	0.169	0.195	3.56
12. のろい (沖縄の性格) *	0.152	<u>-0.394</u>	-0.217	0.225	2.93
10. ひょうきん (沖縄の性格)	0.453	-0.136	<u>0.634</u>	0.626	3.15
11. 感情的 (沖縄の性格)	0.036	-0.110	<u>0.473</u>	0.237	3.71
15. 興奮しやすい (沖縄の性格)	-0.324	0.022	<u>0.470</u>	0.326	3.27
13. 率直 (沖縄の性格)	0.259	0.158	<u>0.457</u>	0.301	3.15
5. 自由な (沖縄の性格)	0.185	0.049	<u>0.447</u>	0.236	3.51
9. 幸福 (沖縄の性格)	0.171	-0.053	<u>0.376</u>	0.173	3.84
30. 頑固 (本土の性格)	0.018	0.271	0.232	0.127	3.56
25. 従順 (本土の性格)	0.359	-0.303	-0.234	0.276	3.30
14. はきはきしない (沖縄の性格)	0.386	-0.202	-0.551	0.494	2.97
因子寄与	3.712	3.049	2.399	9.915	
累積寄与率				30.5%	

\*: 得点範囲 1~5 \*\* : 逆転項目

格」の逆転項目が4項目含まれている。したがって、「本土的性格」を表す因子と解釈した。

第3因子は「沖縄の性格」を表す項目6項目からなっており、「沖縄の性格」を表す因子と考えられる。

#### 4.4 「方言」の構造

東江他(1983)にもある通り、沖縄方言はきわめて多様であり、扱うのが難しい項目である。

方言の使用頻度としては平均値が高い順に「ウーマク(2.44)」「ワジワジー(2.4)」「アチャー(1.54)」「スーコー(1.41)」「ウサガミソーレ(1.33)」「ウフソー(1.31)」「ニービチ(1.29)」「トゥジ(1.28)」「カラジ(1.25)」「チルダイ(1.22)」「ウッティ(1.16)」「ウフツチュ(1.09)」「グブリーサビサ(1.06)」「フドゥマギー(1.05)」「ティヌワタ(1.05)」「ガジラー(1.05)」となっている。「ウーマク」「ワジワジー」以外はほとんど使われていないのが実情である。

方言の日常的使用に関する因子構造は表4に示す通りである。2因子構造として分析することが適当と判断した。16項目のうち、2項目は分類不能であった。

第1因子に分類された7項目を「容姿・身体」、第2因子に分類された7項目を「感情・気質」と名付けた。

自由記述によれば、方言は当初の想定以上に地域によって異なることも示唆された。若年層では多くの方言が日常的に使われず、ほとんどの項目で床効果が表れたが、最終的に想定している調査対象者母集団は、本稿の調査対象者よりも年配の層を含む。方言の使用頻度は全体として高まる可能性があるが、取り扱いには今後も大きな課題が残されたと言える。

#### 4.5 「食習慣」の構造

この尺度は各項目の起源が「沖縄の郷土食」「本土から渡来した日本食」、「外来(洋食, 米国文化が背景)」とはっきりしているの、本来ならば因子と

して単純構造の基準で抽出した場合でもそれぞれ別個に分類されるべきものと言えるが、現在、日常的に様々なものを口にするのがわが国の食習慣となっている。したがって、文化的な影響というほど深いものなのか、単なる個人の嗜好なのかという判断が難しくなっている状況と言える。

口にする頻度が平均的に高い順に「チャンプルー(沖縄食)(3.91)」「沖縄(風)そば(沖縄食)(3.65)」「ポーク(ランチョンミート)(米国食)(3.63)」「納豆(日本食)(3.42)」「ゴーヤー(沖縄食)(3.41)」「ハンバーガー(米国食)(3.33)」「うどん(日本食)(3.03)」「ピザ(米国食)(2.80)」「ステーキ(米国食)(2.60)」「お好み焼き(日本食)(2.58)」「ヒラヤーチー(沖縄食)(2.45)」「ぐるくん(沖縄食)(2.29)」「コーンフレーク(米国食)(2.25)」「日本(風)そば(日本食)(2.22)」であった。平均値から見ると、全て

表4. 方言の因子構造

	第1因子	第2因子	共通性	平均*
4. フドゥマギー	<u>0.892</u>	0.161	0.821	1.07
13. ティヌワタ	<u>0.867</u>	0.165	0.778	1.06
15. ガジラー	<u>0.802</u>	0.184	0.678	1.06
16. グブリーサビサ	<u>0.700</u>	0.216	0.537	1.08
1. ウフツチュ	<u>0.676</u>	0.159	0.482	1.10
6. ウッティ	<u>0.498</u>	0.412	0.418	1.18
2. カラジ	<u>0.468</u>	0.357	0.347	1.29
3. ワジワジー	0.028	<u>0.801</u>	0.643	2.68
8. ウーマク	-0.029	<u>0.713</u>	0.510	2.78
10. アチャー	0.222	<u>0.627</u>	0.442	1.65
11. ウフソー	0.316	<u>0.526</u>	0.377	1.39
5. ニービチ	0.419	<u>0.516</u>	0.442	1.36
7. ウサガミソーレ	0.298	<u>0.505</u>	0.344	1.41
9. チルダイ	0.374	<u>0.476</u>	0.367	1.27
14. トゥジ	0.404	0.439	0.356	1.33
12. スーコー	0.260	0.348	0.189	1.50
因子寄与	4.390	3.339	7.729	
累積寄与率			48.3%	

\*:得点範囲 1~5



の料理が適度に食習慣の中に入っている。沖縄の郷土料理以外で沖縄独特の食べ物と言えるのが「ポーク(ランチョンミート)」である。米軍占領下で急速に広がり、沖縄の食習慣の中にすっかり根づいているが、本土では見られないものである。

食習慣の因子構造は表5に示す通りである。因子数としては、当初の想定通りの3因子構造として分析することが適当であると判断した。16項目のうち、2項目は分類不能であった。累積寄与率は35.7%とやや物足りない。

第1因子の6項目が「沖縄食」、第2因子の3項目が「日本食」、第3因子の3項目が「米国食」を表す。本研究の調査対象者のデータでは「11. 納豆(日本食)」と「12. コーンフレーク(米国食)」を想定通りに分類することはできなかった。しかし、調査対象者の年齢層を上を広げていった場合、食習慣の多様性が現れることが期待できるので、最終的には違った構造の出現も期待される。

食習慣は沖縄アイデンティティの規定要因として重要な文化的要素だと思われるが、項目の見直しは必要だと思われる。なお、ポークランチョンミートは、起源はともかく、因子分類上は「沖縄食」に分類され、回答者の認識としては沖縄の郷土食としてすっかり定着していることが示唆された。

#### 4.6 「風習」の構造

沖縄の生活習慣の中には伝統的に行われてきた行事が多いが、近年は本土の行事も生活習慣の中に浸透してきている。質問項目18は一つ一つの項目の表現が長いので、略して記すこととする。具体的な項目内容は補遺を参照のこと。

行われる習慣の平均値が高い順に、以下のとおりとなった。「正月もち(本土風習)(3.98)」「ウークイ(沖縄風習)(3.89)」「ウンケー(沖縄風習)(3.87)」「正月中身汁(沖縄風習)(3.78)」「お盆・札幌(沖縄風習)(3.64)」「清明祭(沖縄風習)(3.51)」「おせち

表5. 食習慣の因子構造

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性	平均*
9. チャンプルー(沖縄食)	<u>0.793</u>	-0.076	0.048	0.638	4.17
1. 沖縄そば(沖縄食)	<u>0.614</u>	0.141	-0.060	0.401	3.84
2. ゴーヤー(沖縄食)	<u>0.601</u>	-0.035	0.023	0.362	3.65
8. ぐるくん(沖縄食)	<u>0.561</u>	0.372	0.097	0.462	2.48
4. ポーク** (米国食)	<u>0.506</u>	-0.126	0.273	0.346	3.85
6. ヒラヤーチー(沖縄食)	<u>0.503</u>	0.261	0.140	0.340	2.64
5. うどん(日本食)	0.013	<u>0.703</u>	0.070	0.499	3.02
7. お好み焼き(日本食)	0.012	<u>0.600</u>	0.298	0.449	2.52
15. そば(日本食)	-0.193	<u>0.386</u>	0.221	0.235	2.62
10. ピザ(米国食)	0.108	0.230	<u>0.590</u>	0.413	2.79
3. ハンバーガー(米国食)	0.015	0.021	<u>0.529</u>	0.280	3.33
14. ステーキ(米国食)	0.080	0.214	<u>0.515</u>	0.317	2.21
12. コーンフレーク(米国食)	0.128	0.339	0.274	0.206	2.10
11. 納豆(日本食)	0.103	0.178	0.003	0.042	3.50
因子寄与	2.274	1.497	1.220	4.991	
累積寄与率				35.7%	

\*: 得点範囲1~5, \*\*: ランチョンミート

(本土風習) (3.02)「墓参り (沖縄風習) (2.96)」「お彼岸 (本土風習) (2.83)」「旧暦正月 (沖縄風習) (1.97)」「おとそ (本土風習) (1.88)」「ひな人形 (本土風習) (1.81)」「エイサー (沖縄風習) (1.66)」「たなばた (本土風習) (1.43)」「こいのぼり (沖縄風習) (1.429)」「Xマスツリー (沖縄風習) (1.36)」「松飾り (本土風習) (1.27)」「旧暦ひな祭り (沖縄風習) (1.13)」の順となっている。平均値を見る限り、かなり普及している行事とほとんど行われぬ行事に分かれているように感じられる。

風習に関する因子構造は表6に示す通りである。因子数としては、当初の想定通りの2因子構造として分析することが適当であると判断した。18項目のうち、5項目は分類不能であった。「11. お彼岸」を除いては、ほとんどの調査対象者で習慣となっていない項目が分類不能となった。累積寄与率は32.4%とやや物足りない。

表6. 風習の因子構造

	第1因子	第2因子	共通性	平均*
18. ウークイ (沖縄風習)	<u>0.908</u>	-0.005	0.825	4.48
17. ウンケー (沖縄風習)	<u>0.895</u>	0.014	0.801	4.45
15. お盆・札幌 (沖縄風習)	<u>0.843</u>	-0.039	0.712	4.26
14. 清明祭 (沖縄風習)	<u>0.796</u>	-0.054	0.637	4.07
7. 正月中身汁 (沖縄風習)	<u>0.702</u>	-0.074	0.499	4.33
12. 墓参り (沖縄風習)	<u>0.675</u>	0.050	0.458	3.35
5. 旧暦正月 (沖縄風習)	<u>0.363</u>	0.104	0.143	2.12
16. エイサー (沖縄風習)	<u>0.357</u>	0.079	0.134	1.81
2. ひな人形 (本土風習)	0.027	<u>0.508</u>	0.259	1.76
4. たなばた (本土風習)	0.092	<u>0.481</u>	0.240	1.42
13. おせち (本土風習)	0.006	<u>0.479</u>	0.230	2.88
10. おとそ (本土風習)	-0.194	<u>0.469</u>	0.258	1.65
6. 正月もち (本土風習)	-0.049	<u>0.450</u>	0.205	3.83
1. Xマスツリー** (沖縄風習)	0.168	0.118	0.042	1.42
9. 松飾り (本土風習)	-0.231	0.207	0.096	1.16
3. 旧暦ひな祭り (沖縄風習)	0.032	0.329	0.109	1.12
8. こいのぼり** (沖縄風習)	0.096	0.296	0.097	1.43
11. お彼岸 (本土風習)	0.196	0.237	0.094	2.77
因子寄与	4.357	1.480	5.838	
累積寄与率			32.4%	

\*：得点範囲 1~5、\*\*：飾る期間に特徴がある

この尺度も食習慣と同様に、各項目の起源が「沖縄の風習」と「本土の風習」と明確に分かれているものなので、本来ならば因子としてきれいに分類されて欲しかった内容である。その意味では期待外れの結果だが、とりあえず、第1因子の8項目は「沖縄の風習」、第2因子の5項目が「本土の風習」と解釈することができる。

#### 4.7 「沖縄的祭事」の構造

各種の年中行事や祭事に関わる質問項目19は「はい」または「いいえ」の2値で尺度化された項目である。したがって、平均値はそのまま「はい」と回答した者の比率を表すことになる。質問項目19の各項目も長いので、略して記すこととする。

「はい」の比率が高い順に「七五三 (本土風習) (0.81)」「十三祝 (沖縄風習) (0.65)」「ヒヌカン (沖縄風習) (0.50)」「シーサー (沖縄風習) (0.44)」「ユタ (沖縄風習) (0.13)」「ハマウイ (沖縄風習) (0.09)」「郷友会 (沖縄風習) (0.06)」「本土風苗字 (沖縄風習) (0.04)」の順であった。元々は本土の風習であった七五三の浸透度が高い。「ユタの経験」「ハマウイの経験」「郷友会への参加」「本土風への名字の変更」は、ほとんどが「いいえ」と回答した。「本土風への名字の変更」に関しては、戦前の改姓改名運動の中で行われたことであり、本研究の回答者のような若い世代には伝えられていない可能性もある。

沖縄的祭事に関しては、2値項目でもあり、本土の風習であった「七五三」以外を1次元尺度として取り扱うこととする。

#### 4.8 「沖縄アイデンティティ」の構造

質問項目20は沖縄アイデンティティの強さを測ることを目的とした項目群である。やはり、項目が長いので略して記すこと

とする。

20項目採用されたが、平均値が高い順に「沖縄好き (4.61)」「独特 (4.55)」「伝統文化 (4.08)」「誇り (4.07)」「平和 (3.87)」「多様性 (3.81)」「利用 (3.80)」「考え方の相違 (3.51)」「特別 (3.48)」「沖縄人意識 (3.43)」「本土理解 (3.43)」「貧しい (3.40)」「一地方 (3.30)」「特別 (3.24)」「補助金優遇 (3.239)」「遅れ (3.21)」「こだわり (3.20)」「本土意識 (3.11)」「偏見 (2.82)」「パッシング (1.32)」の順であった。おおむね平均値は高く、また、沖縄アイデンティティが肯定的に捉えられている様相がうかがえた。

表7. 沖縄への思いの因子構造

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性	平均*
20. 誇り	<u>0.848</u>	0.090	-0.201	0.767	4.38
1. 沖縄好き	<u>0.733</u>	-0.010	-0.083	0.545	4.76
2. 沖縄人意識	<u>0.654</u>	0.225	0.113	0.491	3.92
3. 平和	<u>0.447</u>	0.191	-0.046	0.238	3.99
13. 伝統文化	<u>0.416</u>	0.249	0.028	0.236	4.18
19. 特別	0.064	<u>0.653</u>	-0.110	0.443	3.25
18. 考え方の相違	0.139	<u>0.600</u>	0.137	0.398	3.56
14. 本土理解	0.259	<u>0.423</u>	0.032	0.247	3.46
5. 利用	0.322	<u>0.387</u>	0.122	0.269	3.92
7. 一地方**	-0.017	<u>-0.433</u>	0.375	0.329	3.34
16. こだわり	-0.215	-0.241	<u>0.521</u>	0.376	3.13
15. 遅れ	-0.057	0.211	<u>0.504</u>	0.302	3.20
10. 貧しい	0.082	0.098	<u>0.494</u>	0.261	3.50
8. パッシング	-0.145	0.070	<u>0.390</u>	0.178	1.32
17. 偏見	-0.002	0.341	0.308	0.211	2.85
6. 独特	0.177	0.322	0.011	0.135	4.56
11. 多様性	0.151	-0.147	0.057	0.048	3.84
4. 特別	0.047	0.333	0.363	0.245	3.48
12. 本土意識	0.005	-0.075	0.272	0.080	3.01
9. 補助金優遇	0.063	-0.017	0.122	0.019	3.28
因子寄与	2.388	1.936	1.492	5.816	
累積寄与率				29.1%	

\*: 得点範囲 1~5, \*\*: 逆転項目

沖縄アイデンティティに関する20項目に関する因子構造は表7に示す通りである。3因子構造として分析することが適当であると判断した。20項目中6項目を単純構造の基準で分類できなかったことにこの尺度の難しさと課題が感じられる。累積寄与率も29.1%とかなり物足りない印象である。

第1因子は5項目で構成されている。総合的な項目内容の構成から「沖縄への愛着・誇り」と命名した。

第2因子は5項目で構成されている。そのうち「1つの都道府県に過ぎない」が逆転項目となっている。相当的な項目内容の構成から「沖縄の特殊性」と命名した。

第3因子は4項目で構成されているが、いずれもネガティブな内容が並んでいる。「コンプレックス」と命名することとした。

#### 4.9 尺度分析

本稿で構成した尺度の平均値、標準偏差、得点範囲、信頼性係数の推定値 ( $\alpha$ 係数) は表8の通りである。「沖縄アイデンティティ」の強さを測定する目的の尺度が3種類、その説明要因となる文化的構成要素を測定する目的の尺度が13種類となった。

項目数は3項目~11項目、 $\alpha$ 係数は0.8を超えて十分に高いと考えられるものもあるが、0.6に満たないものも散見される。方言の「容姿・身体」尺度には著しい床効果が見られるが、それ以外の項目には著しい比率の偏りは見いだせず、おおむね大きな問題は見られないと思われる。

表 8. 尺度分析結果

	尺度名 (項目数)	平均値(%*)	SD	範囲	$\alpha$
歴史的 出来事	歴史・政治 (4)	9.33(33.3%)	3.96	4-20	.83
	芸能・文化 (4)	10.85(42.8%)	3.50	4-20	.73
性格	社会的望ましさ (10)	35.06(62.6%)	5.83	10-50	.82
	本土的性格 (11)	34.44(53.3%)	6.30	11-55	.73
	沖縄の性格 (6)	20.79(61.6%)	3.79	6-30	.64
方言	容姿・身体 (7)	7.72 (2.6%)	2.50	7-35	.85
	感情・気質 (7)	11.54(16.2%)	5.19	7-35	.81
食習慣	沖縄食 (6)	19.35(55.6%)	4.35	6-30	.77
	日本食 (3)	7.83(40.3%)	2.22	3-15	.60
	米国食 (3)	8.72(47.7%)	2.17	3-15	.58
風習	沖縄の風習 (8)	25.23(53.8%)	9.78	8-40	.88
	本土の風習 (5)	12.07(35.3%)	4.27	5-25	.58
	沖縄の祭事 (7)	1.92(27.4%)	1.43	0-7	.58
沖縄 アイデン ティティ	沖縄への愛着・誇り (5)	20.07(75.4%)	4.07	5-25	.76
	沖縄の特殊性 (5)	16.68(58.4%)	3.66	5-25	.65
	コンプレックス (4)	11.12(44.5%)	2.81	4-20	.56

\*: 全体の満点を 100%としたときの得点率

## 5 考察と展望

本研究で作成を試みた諸尺度は、あくまでも現時点で仮に構成したものである。そもそも、文化を測定するという試み自体、沖縄内部の文化的多様性を考えると無謀と考えられるかもしれない。しかし、沖縄アイデンティティ尺度もその規定要因もそれなりに意味があると考えられる。それは、沖縄アイデンティティとして構成された三つの尺度が、それぞれ文化的要素から抽出された規定要因の尺度と興味深い関係を示した (高良・與久田・倉元, 2012) ことに基づく。したがって、本研究のアプローチそのものは、今後の尺度開発の核として用いることが十分に可能と評価できる。

しかし、本研究プロジェクトの目的に照らすと、本研究の調査対象者には著しく年齢的な偏りがある。その偏りを考慮した上で今後の尺度構成の方向性を見据えることが課題となる。

一つは内容的な側面が挙げられる。例えば、方言に象徴される言語生活はアイデンティティに影響を

与える大切な要素と考えられる。床効果がみられた「方言」の2尺度は、果たして今後に分析で不要と考えるべきかという点、そうとは言えない。それは、年齢が上の集団では若者が使わなくなった言葉が日常的に使われている可能性があるからだ。項目内容の再検討の余地はあるが、簡単に除外するわけにはいかない。

もう一つは現実的な研究遂行の手続き上の問題である。補遺に示したように、本研究の調査票は合わせて8ページに及んだ。このような自記式の質問紙調査への回答に比較的馴染んでいる大学生であっても、かなりの負担を感じる分量であったと考えられる。今後、より高年齢の調査対象者に調査を拡大することを考えると、項目を絞り込んで調査協力者の負担を軽減する必要がある。

心理学的測定論の観点から言えば、これらの問題は信頼性 (reliability) と妥当性 (validity) のバランスの問題に帰着する。一つ一つの尺度において項目数を減らすことは尺度の信頼性にダメージを与えることになる。一方、若年層で有効な規定要因として機能していないと判断された尺度だからといって、尺度ごと除去することにはさらに大きな問題がある。現在の調査対象者から母集団を年齢的にも地理的にも拡大した時に、沖縄アイデンティティの規定要因として機能する文化的要素が現れる可能性は否定できない。やみくもに尺度を削ってしまえば、研究プロジェクト全体として、構成概念に代表性不足 (construct under-representation) の問題に陥ってしまう。

平井 (2006) は、Messick (1995) の議論から、測定の妥当性の評価として「内容的側面からの証拠」「本質的側面からの証拠」「構造的側面からの証拠」「一般化可能性からの証拠」「外的側面からの証拠」「結果的側面からの証拠」を挙げた。このうち、「一



般化可能性」「結果的」側面に関しては、本研究プロジェクトで開発しようとしている尺度にはなじまないと思われる。また、その他の検討資料に関しても、実施の制約条件の厳しさから十分な結果が得られない可能性もある。南風原 (2011a) は、現状の心理尺度作成研究が尺度の作成そのものを目的としたものが多く、尺度や構成概念が氾濫する現状が必ずしも望ましくはない状況であることを指摘した。しかし、研究目的に鑑みると、既製の尺度で利用可能なものを探することは難しく、本研究の一環として研究目的に合致した尺度開発は必須のプロセスとなると考えられる。

このように、研究プロジェクトとして本研究は簡単に克服することができない困難な方法論的課題を抱えているが、ここからあえて解決の糸口を見出すとすれば、質的研究法 (qualitative research method) を適宜取り入れていくことだろう。本研究は方法論的には数量化されたデータを統計的に解析して研究を遂行する量的研究法 (quantitative research method) を用いてきた。南風原 (2011b) は臨床心理学 (clinical psychology) 研究という文脈で、現在は「量的研究法と質的研究法をあたかも二者択一のように考えている人」が少なくないという問題点を指摘した上で、「量的研究法と質的研究法は決して二者択一ではなく、車の両輪のようなものだ」という認識を持っていただきたい」と述べている。すなわち、「量的と質的、両方のアプローチを柔軟に使いこなせることが最も望ましい」という主張である。現に、北村・倉元 (2008)、倉元・北村 (2008) は質的研究法と量的研究法を併用することによって、東北大学の学生における学習プロセスのモデルを明らかにし、文系学生と理系学生の典型的な学習観に本質的な違いを見出した。その上で、後に振り返って「意義があった」と感じられるようなカリキュラム構成に関して具体的な示唆を見出した。

現在は、質的研究法、量的研究法を二項対立ではなく、両者を合わせて対象にアプローチしていく方法に「混合研究法 (mixed methods research) という名称が与えられ、その考え方が様々な分野で広がりつつある (例えば、Creswell and plano Clark 2007/大谷 2010)。本研究においても、系統的に整理されたデータとは言えないにしても、東江 (2005) をはじめとするような個人的な逸話 (anecdotes) を交

えた資料が着想の基盤に大きく貢献してきたのは事実である。

若年層で得られたデータを基に、より年代の高いそうにも意味のある尺度を効率よく作成していくためには、インタビュー等の質的方法によるデータ収集が欠かせない。したがって、今後の本研究の展望としては、より想定されている母集団の構成に近いサンプルの収集を目指すと同時に、尺度の妥当性、信頼性のバランスを追求する中で、調査票のスリム化を図るべきだろう。その過程で質的研究法のアプローチを適宜取り入れた混合研究法の研究デザインを構想していくことが有効に機能すると考えられる。

## 付記

本稿のデータは、平成23 (2011) 年9月に岡山市で開かれた日本テスト学会第9回大会において発表されたものを用いている (倉元直樹・與久田巖・高良美樹・中村俊哉, 2011)。本稿は、共同発表者の同意の下、大幅に書き換えて再構成した。本稿への学会発表抄録集原稿の利用を快く許諾してくれた中村俊哉氏 (福岡教育大学)、與久田巖氏 (大阪夕陽丘学園短期大学 [現所属]) に心から感謝申し上げる次第である。

また、本研究は第一著者の私的研究会「異文化間交流研究会」のプロジェクトとして約20年前に構想されたものの流れを汲む。その後、一時期、進展がなく棚上げされていたが、現在は第二著者が中心となり、第三著者も含む三名で進められている。初期の頃に議論に関わり、質問紙作成に貢献していただいたかつての研究会のメンバーに心から感謝の意を表する次第である。

なお、本稿が受理された平成24 (2012) 年5月15日は、期せずして沖縄返還、本土復帰から40周年となる節目の日であった。

## 注釈

- 1) 昭和26 (1951) 年のサンフランシスコ講和条約によって暫定的に米国の沖縄占領の継続が正当化されたが、沖縄に対する日本の「潜在主権」が認められた (鳥山, 2000b)。
- 2) 慶賀使、謝恩使を江戸に送ることを「江戸上り」と称した。江戸上りは幕末までに17回行われた (比嘉・霧多・新里, 1963)。

3) 第1回調査においては「普天間基地の移転問題」が項目として加わっていたが、第2回調査では削除されてしまった。ちなみに、第1回調査で「最も大きな影響を持つもの」として普天間基地を挙げた者は7名いた。

## 文献

東江平之 (1963). 沖縄人の意識構造の研究, 琉球大学人文社会科学研究紀要「人文社会科学研究」1, 1-20.

東江平之 (1983). 沖縄における言語生活および言語能力に関する比較・測定的研究, 昭和55-57年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書(研究課題番号531015).

東江平之・大城亘武・東江康治・本永守靖・石川清治・詫摩武俊 (1983). 中学生の言語生活と方言理解度——琉球方言圏において——, 琉球大学法文学部紀要 社会学編, 26, 1-38.

東江平之 (1991). 沖縄人の意識構造, 沖縄タイムス.

東江平之 (2005). アイデンティティの可能性と役割, 台湾国際研究学会シンポジスト講演, <http://www.tisanet.org/okinawa/1.htm> (最終閲覧日2012年5月11日).

東江康治 (1981). 被理解度による本邦各地方言の比較, 琉球大学心理学教室編「与那嶺松助教授記念論文集」, 与那嶺松助教授追悼記念事業会, 303-325.

新城俊昭 (1997). 高等学校琉球・沖縄史, 東洋企画.

安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭 (2004). 沖縄県の歴史, 山川出版社.

栗国恭子 (2000). トートーメー(位牌), 「沖縄を知る事典」編集委員会編, 沖縄を知る事典, 日外アソシエーツ, 260.

Creswell, J. W. and Plano Clark, V. L., 2007 designing and Conducting Mixed methods Research, Sage (大谷順子訳 [2010] 人間科学のための混合研究法——質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン——, 北大路書房).

Gellner, E. (1983). Nations and Nationalism, Blackwell: Oxford (加藤節監訳 [2000] 民族とナショナリズム, 岩波書店).

南風原朝和 (2011a). 尺度の作成・使用と妥当性の

検討, 日本心理学会第53回総会研究委員会企画チュートリアルセミナー資料(未公開).

南風原朝和 (2011b). 量的研究法, 東京大学出版会.

比嘉春潮・霧多正次・新里恵二 (1963). 沖縄, 岩波新書.

平井洋子 (2006). 測定の妥当性からみた尺度構成——得点の解釈を保證できますか——, 吉田寿夫編「心理学研究法の新しいかたち」, 誠信書房, 21-49.

石井宏典 (1993). 状況的アイデンティティとしての「沖縄人(ウチナンチュ)」——ライフストーリーにみるエスニシティー——, 日本社会心理学会第34回大会論文集, 30-33.

川平尚子 (1988). 沖縄人の自己関連情報の認知に関する研究, 1987年琉球大学法文学部卒業論文(未発表).

金城須美子 (1995). 沖縄の食生活にみるアメリカ統治の影響——アメリカの食文化の受容と変容——, 照屋善彦・山里勝己(琉球大学アメリカ研究会)編「戦後沖縄とアメリカ——異文化接触の50年——」, 沖縄タイムス社, 152-180.

北村勝朗・倉元直樹 (2008). 学士課程教育プロセスから見た全学教育評価研究の試み(1)——東北大学4年次学生を対象とした学習体験の質的分析——, 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 3, 33-47.

北山忍 (1997). 文化心理学とは何か, 柏木恵子・北山忍・東洋編「文化心理学——理論と実証——」, 東京大学出版会, 17-43.

國吉和子 (1998). 沖縄人(ウチナンチュ)のアイデンティティと郷土意識, 沖縄大学地域研究年報, 10, 33-57.

倉元直樹・北村勝朗 (2008). 学士課程教育プロセスから見た全学教育評価研究の試み(2)——東北大学4年次学生を対象とした学習体験の量的分析——, 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 3, 49-61.

倉元直樹・高良美樹・與久田巖 (2005). 沖縄在住者のアイデンティティと歴史・生活習慣——主に若い世代の意識構造——, 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 248-249.

倉元直樹・與久田巖・高良美樹・中村俊哉 (2011). 「沖縄アイデンティティ」の構造——「エスニ

- シティ」と「県民性」の狭間を探る——, 日本テスト学会第9回大会発表論文集, 186-189.
- 林泉忠 (2009). 沖縄住民のアイデンティティ調査 (2005年 ~ 2007年), 政策科学・国際関係論集, 11, 109-147.
- 前原武子・稲谷ふみ枝 (1996). アメリカ留学経験と発達——生涯発達の事例研究——, 前原武子編「生涯発達——人間のしなやかさ——」, ナカニシヤ出版, 184-204.
- Messick, S. (1995). Validity of psychological assessment: Validation of inferences from persons' responses and performances as scientific inquiry into score meaning. *American Psychologist*, 50, 741-749.
- 平直樹・川本ひとみ・慎栄根・中村俊哉 (1995). 在日朝鮮人青年にみる民族的アイデンティティの状況によるシフトについて, *教育心理学研究*, 43, 380-391.
- 高良倉吉 (1993). 琉球王国, 岩波新書.
- 高良美樹・與久田巖・倉元直樹 (2012). 沖縄アイデンティティは測定可能か —沖縄在住の大学生を対象とした調査結果から—, *クオリティ・エデュケーション*, 4 (印刷中).
- 鳥山淳 (2000a). 島ぐるみ闘争, 「沖縄を知る事典」編集委員会編, 「沖縄を知る事典」, 日外アソシエーツ, 124-125.
- 鳥山淳 (2000b). 対日講和条約, 「沖縄を知る事典」編集委員会編「沖縄を知る事典」, 日外アソシエーツ, 57.

#### 問い合わせ先

倉元直樹

E-mail: ntkuramt@m.tohoku.ac.jp

980-8576 仙台市青葉区川内28

東北大学高等教育開発推進センター 高等教育開発部  
入試開発室

補遺 「沖縄県在住者を対象とした意識調査」質問票

## 沖縄県在住者を対象とした意識調査

異文化間交流研究会（代表 東北大学アドミッションセンター

助教授 倉元 直樹）

琉球大学法文学部

助教授 高良 美樹

琉球大学法文学部

非常勤講師 與久田 巖

この調査は、在沖と本土の心理学研究者が共同で行うものです。沖縄県在住者の生活習慣と意識の現状を明らかにすることを目的として行います。沖縄に住む様々な立場の方の暮らしと意識を幅広く調査し、変わり行く沖縄の姿について、統計的手法を用いて心理学的に分析いたします。政治的な意図や立場はありません。また、個人の回答が公表されることはありませんので、ご協力いただいた方のプライバシーは守られます。ですから、安心してお答えください。

なお、以下の点に注意をしてください。

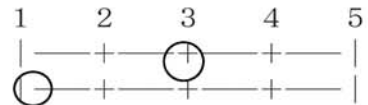
- このアンケートは、〔セクションⅠ〕～〔セクションⅥ〕まであります。正確な分析のため、回答者に特別な限定がある場合を除き、必ず**全ての質問**にもれなくご回答ください。
- 何か分からないことがあれば、調査票の末尾の連絡先にお問い合わせください。
- 〔セクションⅡ〕以降で特別な指示がない場合、回答を選択する項目については以下の例のように、**スケールの番号の部分1ヶ所**だけに○をつけてください。

〔例〕 あなたの最近の健康状態について当てはまる場所に**1つだけ**○をつけてください。

1. 当てはまらない
2. あまり当てはまらない
3. どちらとも言えない
4. 少しは当てはまる
5. 当てはまる

〔適切な回答の例〕

夜眠れないことがある  
食欲がない  
…





[セクション I (あなた自身と沖縄)]

1. あなたの年齢は満何歳ですか。 \_\_\_\_\_ 歳
2. あなたの性別はどちらですか。当てはまる番号に**1つだけ**○をつけてください。  
① 男性            ② 女性
3. あなたの職業的な立場は、以下のどれですか。当てはまる番号に**1つだけ**○をつけてください。  
① 学生・生徒   ② フリーター・無職   ③ 農林漁業   ④ サラリーマン (県外転勤なし)  
⑤ サラリーマン (県外転勤の可能性あり)   ⑥ サラリーマン (本社・本拠地が県外)  
⑦ 主婦 (パート含む)   ⑧ 自営業・経営者・商店主・開業医等   ⑨ 失業・求職中  
⑩ 退職後・隠居等   ⑪ その他 (具体的に\_\_\_\_\_)
4. あなたやあなたの先祖は、いつごろから沖縄県に住んでいますか。当てはまる番号に**1つだけ**○をつけてください。  
① 先祖代々   ② 祖父母の代に移住   ③ 両親の代に移住  
④ 自分の代に移住   ⑤ 自分だけが一時的に滞在
5. あなたは、**沖縄県以外**に住んでいたことがありますか (旅行や一時滞在を除く)。  
①ある            ②なし
5. において①と回答した方は6. の a) から c) に回答してください。  
②と回答した方は7. へお進みください。
6. **沖縄県以外**に住んでいたのは次のどれに当てはまりますか。当てはまる番号に○をつけて、カッコ内には一番長く住んでいた場所を具体的に記入してください。  
①国内の沖縄県以外 (具体的に\_\_\_\_\_ )   ②国外 (具体的に\_\_\_\_\_ )
- a) **沖縄県以外**に住んでいた期間はどのくらいですか。当てはまる番号に**1つだけ**○をつけてください。  
① 通算して2年未満   ② 通算して2～6年程度   ③ 通算して7～10年程度  
④ 通算して11～15年程度   ⑤ 通算して16年～20年程度  
⑥ 通算して21～25年程度   ⑦通算して26年～30年程度   ⑧通算して31年以上
- b) 沖縄県以外に住んでいたのはどの時期ですか。当てはまる番号に**いくつでも**○をつけてください。  
① 小学校入学前   ② 小学校低学年   ③ 小学校高学年   ④ 中学校  
⑤ 高校   ⑥ 専門(専修)学校・短大・大学   ⑦専門(専修)学校・短大・大学卒業後

c) 沖縄県に住むようになった(戻ってきた)理由は何ですか? 当てはまる番号に**いくつでも**○をつけてください。

- ① 親や夫の転勤      ② 進学・就職先が沖縄だった      ③ 自分自身の転勤
- ④ 沖縄にあこがれて移住した      ⑤ トートーメを継ぐために帰ってきた
- ⑥ 県外の居住先になじめなかった      ⑦ 進学・研修等のため一時的に県外に出ただけ
- ⑧ 戦時中に県外に疎開した      ⑨ やむを得ぬ事情で沖縄に帰らざるを得なかった
- ⑩ その他(具体的に \_\_\_\_\_ )

7. 今、あなたが住んでいるところは、次のどれにあてはまりますか? 当てはまる番号に**いくつでも**○をつけてください。

- ① 生まれてからずっと同じところに住んでいる      ② 沖縄県内の離島から移動してきた
- ③ 沖縄県内の本島内の別の地域から移動してきた      ④ 沖縄県外から移動してきた
- ⑤ 国外から移動してきた

7. において②～⑤と回答した方だけにかがいます。

今の地域に住んでどれくらいになりますか。当てはまる数字を記入してください。

今の地域に住んで \_\_\_\_\_ 年くらい

8. あなたの家族や親戚も、沖縄に住んでいますか? 当てはまる番号に**1つだけ**○をつけてください。

- ① 県内に住んでいるのは自分だけ      ② 県内に住んでいるのは自分と自分の家族だけ
- ③ 家族や親戚が県内にいるが、自分の居住地域にはいない
- ④ 自分の居住地域にも親戚がいるが、多くは県内の別の地域に住んでいる
- ⑤ 多くの親戚が自分と同じ地域に住んでいる

9. トートーメについておうかがいします。あなたは、以下のどれに当てはまりますか。当てはまる番号に**1つだけ**○をつけてください。

- ① トートーメを継ぐ立場      ② トートーメを継がない立場
- ③ トートーメを誰が継ぐか未定      ④ トートーメとは何かわからない(知らない)
- ⑤ トートーメがない(問題ない。もたない)
- ⑥ その他(具体的に \_\_\_\_\_ )

10. あなたは、これからも沖縄に住み続けていきたいですか? 当てはまる番号に**1つだけ**○をつけてください。

- ① できるだけ早く県外に移住したい
- ② 勤務期間や学校を終えたら県外に移住する予定
- ③ いずれは県外に移住しなければならないが、長く沖縄に住んでいたい
- ④ できれば、このまま沖縄に住み続けたい
- ⑤ 仕事を変えたり就職を見つけたりしてでも、沖縄に留まりたい
- ⑥ なにが何でも、沖縄に住み続ける

[セクションⅡ (沖縄の歴史・文化)]

11. あなたは、以下の歴史的な出来事が起こったとき、どこにいましたか？当てはまる番号に**1つだけ**○をつけてください。

1. まだ生まれていなかった
2. 生まれていたが、幼かったので覚えていない
3. 主に沖縄県外にいた
4. 主に沖縄県内にいたが、身近に体験したことはない
5. その出来事に関して、身近に体験したできごとことがある

	1	2	3	4	5
(1) 沖縄戦 (昭和 20 [1945] 年)		— + —	+ — + —	+ — + —	
(2) 復帰運動 (昭和 35 [1960] 年頃から)		— + —	+ — + —	+ — + —	
(3) 沖縄返還 (昭和 47 [1972] 年)		— + —	+ — + —	+ — + —	
(4) 国体日章旗焼き捨て事件 (昭和 62 [1987] 年)		— + —	+ — + —	+ — + —	
(5) 沖縄水産高校の甲子園準優勝 (平成 2 [1990] 年頃)		— + —	+ — + —	+ — + —	
(6) 沖縄出身タレントブーム (平成 7 [1995] 年以降)		— + —	+ — + —	+ — + —	
例：安室奈美恵などのアクターズスクール出身者以降					
(7) 沖縄サミット (平成 12[2000] 年)		— + —	+ — + —	+ — + —	
(8) NHK ドラマ「ちゅらさん」(平成 13 [2001] 年)		— + —	+ — + —	+ — + —	

12. あなたが沖縄のことを意識した歴史的出来事について自由に記述してください。

13. あなた自身にとって、以下の歴史的な出来事の影響をどのように感じますか？良い意味でも悪い意味でもよいので、当てはまる番号に**1つだけ**○をつけてください。

1. 全く影響はなかった、知らない
2. 少しは影響があったが昔のことである
3. 大いに影響があったが昔のことである
4. 今でも少しは当時の影響を感じる
5. 今までの自分を左右する大きな出来事だと感じる

	1	2	3	4	5
(1) 沖縄戦 (昭和 20 [1945] 年)		— + —	+ — + —	+ — + —	
(2) 復帰運動 (昭和 35 [1960] 年頃から)		— + —	+ — + —	+ — + —	
(3) 沖縄返還 (昭和 47 [1972] 年)		— + —	+ — + —	+ — + —	

	1	2	3	4	5				
(4) 国体日章旗焼き捨て事件 (昭和 62 [1987] 年)		—	+	—	+	—	+	—	
(5) 沖縄水産高校の甲子園準優勝 (平成 2 [1990] 年頃)		—	+	—	+	—	+	—	
(6) 沖縄出身タレントブーム (平成 7 [1995] 年以降)		—	+	—	+	—	+	—	
例：安室奈美恵などのアクターズスクール出身者以降									
(7) 沖縄サミット (平成 12[2000] 年)		—	+	—	+	—	+	—	
(8) NHK ドラマ「ちゅらさん」(平成 13 [2001] 年)		—	+	—	+	—	+	—	

14. 11. および 13. で挙げられた歴史的な出来事の中で、あなた自身にとって、最も大きな影響を持つものはどれですか？良い意味でも悪い意味でもよいので、当てはまる番号を( ) に **1つだけ** 記入してください。

私にとって最も大きな影響を持つ出来事は ( ) 番

理由 ( \_\_\_\_\_ )

[セクションⅢ (性格、ことば)]

15. **あなた自身の性格**は、以下のことばにどの程度当てはまると感じますか。当てはまるところに **1つだけ** ○をつけてください。

1. 当てはまらない      2. あまり当てはまらない      3. どちらとも言えない  
 4. 少しは当てはまる      5. 当てはまる

	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5												
のんき		—	+	—	+	—	+	—	+	—		勤勉		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
ひとがいい		—	+	—	+	—	+	—	+	—		現実的		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
おおらか		—	+	—	+	—	+	—	+	—		注意深い		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
人情に厚い		—	+	—	+	—	+	—	+	—		敏感		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
自由な		—	+	—	+	—	+	—	+	—		利己的		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
正直		—	+	—	+	—	+	—	+	—		神経質		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
協力的		—	+	—	+	—	+	—	+	—		礼儀正しい		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
単純		—	+	—	+	—	+	—	+	—		思慮的		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
幸福		—	+	—	+	—	+	—	+	—		辛抱強い		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
ひょうきん		—	+	—	+	—	+	—	+	—		従順		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
感情的		—	+	—	+	—	+	—	+	—		疑い深い		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
のろい		—	+	—	+	—	+	—	+	—		主体的		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
率直		—	+	—	+	—	+	—	+	—		道徳的		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
はきはきしない		—	+	—	+	—	+	—	+	—		独立心が強い		—	+	—	+	—	+	—	+	—	
興奮しやすい		—	+	—	+	—	+	—	+	—		頑固		—	+	—	+	—	+	—	+	—	



16. あなたは、日常的に以下のことばをどの程度使いますか。当てはまるところに**1つだけ**○をつけてください。

1. 全く使わない    2. あまり使わない    3. どちらとも言えない  
4. 少しは使うことがある    5. よく使う

	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5
ウフツチュ		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
カラジ		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ワジワジー		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
フドゥマギー		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ニービチ		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ウッティ		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ウサガミソーレ		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ウーマク		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
チルダイ		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
アチャー		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ウフソー		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
スーコー		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ティーヌワタ		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
トゥジ		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ガジラー		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
グブリーサビサ		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+

[セクションIV (食べ物、習慣)]

17. あなたは、以下の食べ物をどの程度頻繁に口にしますか。当てはまるところに**1つだけ**○をつけてください。

1. 全く口にしない    2. たまには口にすることがある    3. どちらとも言えない  
4. ときどき口にする    5. 毎日のように口にする

	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5
沖縄 (風) そば		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ゴーヤー		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ハンバーガー		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ポーク (ランチョンミート)		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
うどん		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ヒラヤーチー		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
お好み焼き		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ぐるくん		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
チャンプルー		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ピザ		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
納豆		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
ステーキ		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
コーンフレーク		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+
日本 (風) そば		—	+	—	+	—	+	—	+	—	+

18. あなたの家では、以下のようなことに関して、毎年どのようにする習慣になっていますか。当てはまるところに**1つだけ**○をつけてください。

1. 全くそうしない    2. たまにそうする年もある    3. どちらとも言えない  
4. そうする年が多い    5. 必ず毎年そうする

	1	2	3	4	5		
クリスマスツリーを正月すぎまで飾る		—	+	—	+	—	+
ひな祭りのとき、家にひな人形を飾る		—	+	—	+	—	+
ひな祭りを旧暦で行う		—	+	—	+	—	+
たなばたのときに、たんざくを書いて飾る		—	+	—	+	—	+

	1	2	3	4	5				
正月を旧暦で祝う		—	+	—	+	—	+	—	
正月に、もちを食べる		—	+	—	+	—	+	—	
正月に、中身汁を食べる		—	+	—	+	—	+	—	
こどもの日を過ぎてもこいのぼりを飾っている		—	+	—	+	—	+	—	
正月の松飾りは15日（または、14日）に神社で焼く		—	+	—	+	—	+	—	
正月に、おとそを飲む		—	+	—	+	—	+	—	
お彼岸（春分の日、秋分の日頃）に墓参りをする		—	+	—	+	—	+	—	
墓参りのときに、墓の前に皆で集まり食事をする		—	+	—	+	—	+	—	
正月に、おせち料理をつくる		—	+	—	+	—	+	—	
清明祭（シーミー）（旧暦3月）に墓参りをする		—	+	—	+	—	+	—	
お盆のときにお金（ウチカビ、紙で作ったお金）を焼く		—	+	—	+	—	+	—	
旧盆のときにエイサーを踊る		—	+	—	+	—	+	—	
旧盆の初日にウンケー（祖先の霊を迎える）をする		—	+	—	+	—	+	—	
旧盆の最後にウークイ（祖先の霊を送る）をする		—	+	—	+	—	+	—	

19. 以下の質問について、はい、または、いいえのいずれか当てはまるところに**1つだけ**○をつけてください。

こどものとき、七五三の祝いをしてもらった	(はい)	(いいえ)
私の苗字は、沖縄風から日本風に変えられたものだそう	(はい)	(いいえ)
こどものとき、十三祝をしてもらった	(はい)	(いいえ)
困ったとき、ユタのところにいったことがある	(はい)	(いいえ)
郷友会（青年会、婦人会）に所属している	(はい)	(いいえ)
自宅にシーサーを飾っている	(はい)	(いいえ)
自宅の台所にヒヌカン（火の神）を祭っている	(はい)	(いいえ)
浜下り（ハマウイ）をしたことがある	(はい)	(いいえ)

〔セクションV（沖縄に対する思い）〕

20. 以下は、沖縄に対する考え方や意見です。あなたは、そのような考え方をどう思いますか。当てはまるところに**1つだけ**○をつけてください。

1. そう思わない      2. あまりそう思わない      3. どちらでもない  
4. ややそう思う      5. そう思う

	1	2	3	4	5				
私は沖縄が好きだ		—	+	—	+	—	+	—	
私は日本人というよりも沖縄人という意識が強い		—	+	—	+	—	+	—	
一般に、沖縄の人は平和を愛する気持ちは強い		—	+	—	+	—	+	—	

	1	2	3	4	5				
沖縄の人たちは自分たちが特別だと思っている		—	+	—	+	—	+	—	
沖縄は本土や中央政府からいつも都合よく利用されてきた		—	+	—	+	—	+	—	
沖縄の文化は本土の文化と違って独特だと思う		—	+	—	+	—	+	—	
沖縄は日本の1つの都道府県であるにすぎない		—	+	—	+	—	+	—	
私が本土に行ったら沖縄から来たことを知られたくない		—	+	—	+	—	+	—	
沖縄は補助金などに関して優遇されている		—	+	—	+	—	+	—	
沖縄は貧しい		—	+	—	+	—	+	—	
沖縄といっても場所によって違うので一口に言えない		—	+	—	+	—	+	—	
自分達で意識するほど、本土の人は沖縄を特別とっていない		—	+	—	+	—	+	—	
沖縄の伝統文化を守るために自分達で努力すべきだ		—	+	—	+	—	+	—	
本土の人は、沖縄のことをもっと理解すべきだ		—	+	—	+	—	+	—	
沖縄は様々な面で遅れている		—	+	—	+	—	+	—	
いつまでも「沖縄」、「沖縄」とこだわる必要はない		—	+	—	+	—	+	—	
沖縄に対する偏見・差別が残っている		—	+	—	+	—	+	—	
一般に、本土の人の考え方は沖縄の人の考え方とは違う		—	+	—	+	—	+	—	
沖縄は日本にとって特別な存在だ		—	+	—	+	—	+	—	
私は沖縄県民であることを誇りに感じる		—	+	—	+	—	+	—	

調査へのご協力ありがとうございました。

## Structure of Okinawan Identity and its Prescribing Factors: Scaling from Multiple Historical and Cultural Viewpoints.

Naoki T. KURAMOTO\*, Miki TAKARA\*\*, Katsuro KITAMURA\*\*\*

\*Graduate School of Educational Informatics / Education Division, Tohoku University  
Center for the Advancement of Higher Education, Tohoku University

\*\* Faculty of Law & Letters, Ryukyu University

\*\*\*Graduate School of Educational Informatics / Research Division, Tohoku University

### ABSTRACT

The present study is a trial for a project on capturing Okinawan identity by using evidenced-based research methods. The word '*Uchinanchu*' is often used among Okinawan people when referring to themselves, especially when contrasting with ordinary Japanese people, '*Yamatonchu*'. These terms evoke the distress of the Okinawan people throughout their history. Okinawan identity has been formed through its unique history. Okinawa was formerly an independent kingdom called the '*Ryukyu Kingdom*' for more than a century. Since it became a part of Japan, it has repeatedly met misfortunes. Okinawa is the only place within the current Japanese territory that experienced land battle during World War II. After the war, the United States Civil Administration of the Ryukyu Islands reigned over Okinawa with the strong backing of US forces. Okinawa finally came back to Japan in 1972; however, many troubles related to US military camps remind the Okinawan people of historical and political grievances even now. The Okinawan people have always suffered with respect to their identity because of pressures from the outside world, sometimes assimilating to and sometimes differentiating themselves from the Japanese mainstream. Some researchers doubtlessly treat *Uchinanchu* identity as an ethnic matter. However, as researchers, we should be careful to avoid encouraging nationalism and ethnocentrism if our intention is to execute value-free social scientific research.

The present study attempts to form scales to measure *Uchinanchu* identity and its associated factors for the case of university students from the viewpoint of cultural psychology using quantitative methodology. Some obstacles will need to be overcome before the developed scales can be applied to other age groups. The present results suggest the necessity for introducing a mixed methods research approach that partly utilizes qualitative methodology, such as interviews.

**Key words:** Okinawa, *Uchinanchu*, ethnic identity, cultural psychology, mixed methods research